

2010

視覚を使わないグラフィックデザイン

Graphic Design for the Visually Challenged and Visually Impaired

AD11 島上 直哉
指導教員 西野 隆司

1. 研究目的

現在、人間の情報を得る方法の約9割が視覚だと言われているという事を着眼点とし、その中で視覚に障害を持った人へのサポートが非常に少ない事に気付いた。そこで、視覚を使わないグラフィックデザインという研究テーマを立てた。

2. 調査と分析

大きく分けて3つの調査を行った。1つ目にヘルパーをつけて学校から渋谷までを目隠しをして全盲を体験したこと。2つ目に「サイトワールド」という全国から視覚障害者が集まり、バリアフリー等の新開発している商品に触れたり、実際に視覚障害者が主催の講義に参加した。3つ目に「Dialog In The Dark」という、全盲の人と一緒に真っ暗闇の空間を歩き、実際に食事等をして全盲の体験をすることができる施設へ行き、参加した。



↑ 全盲体験



↑ サイトワールド

3. コンセプトの立案

「触覚による情報伝達」というコンセプトを立て、前述の調査を行った結果、視覚障害者の娯楽施設として利用される事が多い「コンサートホール」に注目した。コンサートホールは、聴覚で楽しむ施設であり、視覚に頼らないで楽しむ事ができるのである。しかし、バリアフリーの適用されているコンサートホールを調べたところ、車椅子の人に対するサポートはあるものの、視覚障害者へのサポートは見られなかった。また、視覚障害者の娯楽施設でもあるコンサートホールだが、「日頃行きたくても周りに迷惑をかけるのではないかと、等の精神的バリアがあつてなかなか行けない」というジレンマがあり、「自立して行動しながら楽しみたい」という願望が強く感じられた。そこで、視覚障害者の自立補助用具としての触地図の研究に取り組むに至った。

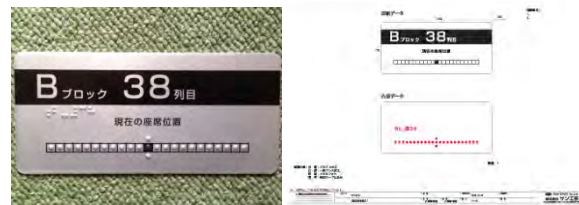
4. デザイン展開

まず、電車内の位置標示板等を製作している、株式会社サン工芸様に依頼し、サンプルと費用の

見積りを依頼した。サンプルは、ひと席ごとに一枚のプレートを設置し、自分の現在いる場所をプレートの点字(凹凸部分)で把握するというものである。見積りは渋谷のBUNKAMURAにあるオーチャードホールというコンサートホールを想定したもので、製品単価は2,300円×2,150席で4,945,000円かかる。しかし、これは全2,150席に設置した場合のもので、ホールの一部分にバリアフリーのエリアを設けたりする事でコストは4分の1程度に収めることができる。また、視覚障害者のサポートをする従業員を雇うという事等も可能だが、この研究は視覚障害者の自立補助を目的としている為、このような形が最も適していると考えた。

5. 完成図

下記のデザインサンプルを使用した検証を行い、複雑な形を使用しない事と、触れていて疲れない形を取り入れることにした。



また、発泡インクを使用する事で、低コストで済むのではないかと推測し、約70mm×150mmのアルミプレートを使用して発泡インクによってできた凹凸で視覚障害者に現在地の情報を伝えるという事が可能となる。

6. 結論

視覚伝達デザインと言われるグラフィックデザインの中で視覚に頼らずに情報を伝えるという事はとても困難であった。しかし、時には目で見るとよりも実際に触れて情報を知る方が早い場合もあり、今回の研究で使用したコンサートホールに限らず、映画館などの薄暗い施設では、健常者に対しても効果的に利用できると考がえる。このように、触覚の利用は、まだまだ改善の余地が残っており、さらに研究を進めることで、バリアフリーデザインからユニバーサルデザインへ進化させて行くことが可能になると確信した。

文献

[1]田中ひろし(著・編)『これだけ点字-さわってわかるてんじのふしぎ これだけはおぼえておきたい』、同友館、1997